

### 巻頭言：5年目の植生史研究会

植生史研究会が発足して5年目を迎えるこの年は、ただの記念すべき年であるというよりも、いろいろな節目を迎える年であると思います。まずこの春、植生史研究会の前身である植生史研究談話会発足時から会の活動・運営を温かく見守ってきて下さった大阪市立大学の粉川昭平氏、植生史研究会と会誌の欧文の名づけ親でもある東北大学の相馬寛吉氏が、同時に定年で現職を退かれます。この夏、これまでは日本生態学会大会の自由集会として開いてきた植生史研究会談話会を、はじめて日本第四紀学会の小集会として開催する予定です。さらにこの秋、これまで事務局のある大阪や近隣の天津で開催してきた植生史研究会シンポジウムを、はじめて事務局の手から離れて、千葉県立中央博物館で開催する予定です。植生史研究談話会が発足したのは1982年1月のことですから、それから数えれば9年目になります。10年目の1991年には隣の中国で国際第四紀学連合会議が、続く1993年には日本で国際植物科学会議が予定されており、これら両会議の開催に多くの植生史研究会メンバーが関わっていることから、海外の植生史研究者との交流を通してこれからの研究会を模索する年にもなると思います。

植生史研究会が開催してきたこれまでの会合を振り返ってみると、まだ本質的な部分にメスを入れるところには来ていないように思います。植物化石の同定の問題や植物化石群集から実在した植物群・植生を復元する上でのタフオノミーの問題など、いくらかの基礎的問題を掘り下げてはきたものの、生命体としての植物の存在様式、すなわち種というものはどのようなものなのか、それらがどのようにして生育していたのか、などといった本質的な、一層息の長い問題に触れることを多少とも遠ざけてきたようにも思えます。書かれてある事実や議論を踏み台にしてあでもないこうでもないやり合うのは、たしかに面白く新しい視点をつくり出すことにもなるのですが、よくよく考えてみると、たとえば標本を通しての事実確認がネックになっているようなことが多いように思います。植物化石群集の時系列解析が、生命体という問題を飛び越えて、気候変動曲線を描く手法でしかないといった風潮にはよくよく触れるところです。

とはいえ、会を重ねるごとに、胃壁にべったりくっついたそうした問題が以前にも増して感じられるようになってきたことは否めないと思います。本誌の粉川昭平氏の要旨にも書かれていますが、メタセコイアなど多くのタイプ標本を含む三木茂氏の標本が刻々と整理されており、近い将来閲覧も可能となるとのことですが、タイプ標本の中にもすでに失われたものもあるのには、胃壁の孔の開いたほどの痛みを感じます。実際には個人的所有物に近い状態で保管されていることが多い植物化石の標本が、損失の恐れから免れ、日常第三者の検討に委ねうるような状況をつくり出すことも問題解決への大きな課題かと思えます。そしてもっと大切なことの一つに、手間暇の掛かる標本作成への情熱あるいはそれを支える環境を育てていくことがあるように思うので

すが、そうではないでしょうか。

植生史研究は幅広い領域にわたっており、すべてが種という問題や標本をベースに進められているわけではありませんが、植生史研究ひいては自然史研究全体の重要な部分をなしていることは確かでしょう。植生史研究会シンポジウムでは多彩で幅広いテーマが取り上げられつつありますが、それによって多彩で幅広い植生史研究を相互理解し、全体にとっての基礎を模索しようとの要請を受けた意図があるからです。うわべだけでなく、内部から滲み出してくる諸問題を取り上げる時期も近づいてきたと、節目の年を迎えて感じているところです。

1990年1月10日 辻 誠一郎

## 相馬寛吉\*：植生史研究会談話会「花粉分析による 復元群落（植生）の空間的広がり」一趣旨説明

各花粉型から判断される分類群のそれぞれの生態学的背景を基に、古植生を含む古環境を復元する試みは von Post (1916) 以来、各種の試行錯誤を重ねて一応の成果を挙げてきた。植物相や植生型の多様な日本でも、北米や欧州と同様、現在未解決の問題を多数残しながらも、一義的な調査段階を終え、個別的な特殊問題への取組が始まっている。その一つに現地性 (autochthonous)・異地性 (allochthonous) の問題がある。これは化石全般に言えることであるが、その生物の生活範囲 (biotope) と分布範囲 (thanatotope) とが一般に一致せず、特に花粉は大気中に飛散し、大なり小なりの距離を経て堆積するからである。しかも、その間の経路は複雑で、時には更に二次的に流水などの営力が働くことも少なくない。これら複雑な花粉の動態を追求すべく、モデル化を含む研究例は多数ある。しかし、これらの研究成果は必ずしも過去の植生復元の考察に充分生かされているとは言いきれない。

このような問題を追求する場合、他の観点、即ち現実に存在する堆積物の花粉分析結果から上記の問題に焦点を合わせた考察を深める方法もある。三浦修氏は森林土壌がその場の群落の種構成を強く反映する極端な局地性の実体を取り上げ、従来花粉分析の多くの例で、この局地性を寧ろ除外視する傾向があったことへの問題提起を含む内容を照会するであろう。また、米林仲氏は丘陵地を含む小規模の空間的広がりにおける植生の局地性を例として花粉供給源の各種群落型のモザイク分布の考察を照会するであろう。

\*〒657 仙台市青葉区川内 東北大学教養部生物学教室  
Department of Biology, College of Liberal Arts, Tohoku University, Kawauchi, Aoba-ku, Sendai 980, Japan.